別紙様式３

平成２４年度 博士学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

運動器の機能向上プログラム実施後の要支援高齢者における心理的変化の分析
－マズローの基本的欲求を基盤とした調査より－

学位の種類： 博士（作業療法学）
首都大学東京大学院 人間健康科学研究科 人間健康科学専攻 作業療法学域

氏 名：望月 秀樹
（指導教員名：大嶋 伸雄 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式１枚（Ａ４版）に収めること

本研究は，通所介護施設にて介護予防として運動器の機能向上プログラムを実施した要支援高齢者を対象とし，マズローの基本的欲求の階層理論に基づき心理的変化を分析し，また同時に身体的要因，社会・環境要因，心理的要因との関連を検討することで，介護予防における現在のわが国の高齢者の特性を明らかにすることを目的とした．

研究方法は，対象者に対し運動器の機能向上プログラムとして３か月間パワーリハビリテーション（以下パワーリハ）を実施し，身体的要因として運動機能を，社会・環境要因として日常生活の状況を，心理的要因としてマズローの基本的欲求を，それぞれパワーリハ開始時および３か月後に調査した．調査項目として，運動機能は，握力，開眼片足立，ファンクショナルリーチ，椅子座位体前屈，Timed up & go test，６分間歩行，5m 歩行速度を測定した．日常生活状況の調査は，NPO 法人パワーリハビリテーション研究会作成によるパワーリハ生活行動評価票を用いてアンケート調査を行った．マズローの基本的欲求は，Tickle らによる項目を用い，実際の質問項目は大川によって本邦に紹介されたものを使用した．結果の分析は，運動機能と生活行動票の改善項目をみるために，開始時と３か月後の各項目の平均値の前後比較を行った．基本的欲求の回答結果は，開始時および３か月後の欲求の傾向およびその変化をみるために因子分析を行いそれぞれ比較した．また，運動機能（身体的要因）と日常生活状況（社会・環境要因）と基本的欲求（心理的要因）との関係性をみるために，開始時および３か月後の各要因に対し共分散構造分析を行った．

結果，開始時に比べ３か月後には歩行を中心とした運動機能と役割や外出頻度の増加などの活動性が改善・向上した．それに伴い，「所属と愛の欲求」と「生理的欲求」を中心とした欲求の階層構造が変化した．それらを分析した結果，介護予防プログラムを進める上で，導入時は所属感や対人交流に考慮し，効果的な運動プログラムを提供し，得られた効果により更なる運動に対する意欲を引き出すような取組みが必要であると結論づけられた．また，開始時と３か月後のパス図を比較した結果，３か月後は心理的要因の乖離が見られ，これに対し自己実現の欲求を持ち続けることが必要であると考えられた．さらに，歩行能力の改善，自己実現の欲求を持ち続けること，外出頻度の向上が介護予防における関連要因として示された．